

放射能の降る村

(The Village In The Fallout)

多喜百合子

フクシマの事故後も
避難指定区域の村に残った人々が 少しいる。

逃げる時 飼い主たちが小屋に置き去りにした豚は
共食いを始め そして最後の一匹も死んだ。
柵を乗り越えて脱走した牛の群れが
人気のない校庭を疾走していた。
被曝牛によって放射能が散らばると
それもすべて薬殺された。

村に静けさが戻り二度目の春がきた。
桜が今まで見たこともないほど見事に咲いた。
秋には コメも記録的な豊作になった。

放射線セシウムは 植物の栄養素カリウムとよく似ている。
桜もコメも野菜も 葉から幹から根からどんどん吸収した。
放射能をいっぱい取り込んで大きく育った。
残った村人は それを毎日食べ ニワトリを飼い
前と変わらぬ 自給自足の生活を続ける。
渡り鳥たちも いつもの年と変わらず田んぼに水浴びにやってきた。

村人の K さんはいう。
「私たちは被害者ではない。自然からみれば 人間は皆 加害者です」と。

原爆投下後わずか1か月 1945年9月に
ヒロシマの地に真っ赤なカンナが一輪咲いた。
100年は何も生えないと思っていた焦土に花が咲いたと 皆喜んだ。
あのときは カンナがカリウムとまちがえて放射線セシウムを吸ったからとは
だれも思わなかった。